

生殖医療（技術）に関する生命倫理を考える場合、ヒトの生命の始まりをどの時点で置くかという問題は避けて通れない。科学や宗教でほぼ一致する見解は、受精の瞬間という説である。確かに、自然の摂理（有性生殖）に従って生まれてくる子の生命の始まりを、受精の瞬間とする考えには妥当性があると思われる。しかし、有性生殖を経ずに誕生する子の場合には、どう解釈すべきであろうか？ クローン人間を産生し得る技術の誕生は、ヒト生命の捉え方の見直しを迫っているともいえる。ヒトは約六十兆個という膨大な数の細胞から成る生物で、約百年の個体としての生涯（生死）をおくる間に、特殊な細胞を除いたほとんどの体細胞が別の新しい細胞に置き換わり、細胞レベルの生死が繰り返される。このような重層的な生命に支えられ、我々ヒトを含めた多細胞生物は個としての生命を維持している。人体を構成する一つの細胞の生命と、それらに支えられ維持される個体の生命との関係はどう捉えるべきであろうか？ 単なる部品と全体という機械論的な捉え方

ヒト受精卵の尊厳性

前場良太

では限界があることは明らかであるが、上位の生命と下位の生命というような固定的な捉え方ではないのだろうか？ 仏法では、生命の quality（境界）ともいべき範疇を十界として分類するが、十界論の最大の特徴は生命の quality が固定されたものではなく、縁により変わり得るものであるという潜在的可能性を十界互具として説いている点である。受精卵はヒトの萌芽と位置づけられる特殊な細胞であることから、他の体細胞とは区別して尊厳性が付与されるべきとの議論がある。しかし、クローン技術は受精卵に限らず、どんな体細胞（由来の DNA）からでもヒトが誕生し得ることを示しており、一つの生命の潜在的な可能性を科学的な立場から証明しているといえるかもしれない。今この瞬間に存在している生物の過去から未来を通観すれば、物質的な実体は無いに等しく、「生命の尊厳」を特定の物的実体に付与するとう発想自体に限界が生じているように思える。

（まえばり）りょうた／東洋哲学研究所委嘱研究員